

ヨハネの福音書 13 章 34-35 節

## クリスチャンのしるし

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

皆さんおはようございます。皆さんにまたお会いできて嬉しいです。今まで何度か説教した中で、何年も前に、英国にあるクリスチャン学習センターで勉強した時のことについてお話しました。その場所は「ラブリ」コミュニティと呼ばれていて、クリスチャン宣教師であり、神学者でもあったフランシス・シェーファー師によって設立されたものです。最初のコミュニティはシェーファーの故郷であるスイスで設立され、そして二番目となる英国南部のコミュニティができました。私は 1986 年と 1991 年の 2 回、英国のラブリで勉強しました。このコミュニティの基本精神は、人生のあらゆる側面において聖書が何らかの関わりを持つというものですから、そこに行けばどのようなトピックについてもクリスチャンの観点から学ぶことができます。神学でも、家族関係についてでも、キリスト教倫理や科学、近代哲学であっても、です。録音済みの講義や蔵書も数多くそろえてあります。今日のスライドには「ラブリ」コミュニティのホームページからお借りした、英国学習センターの一室の写真を載せました。私はこの部屋で何時間も時を過ごし、ここにある書籍も数冊読みました。ある日、本棚から読み漁っていると、好奇心をそそるタイトルの本に出くわし、私の注目を奪いました。そのタイトルは「**“The Mark of the Christian.”** (クリスチャンのしるし-仮題)」でした。クリスチャンのしるし...それは小さな本で、フランシス・シェーファー師自らが書いたものでした。このタイトルは、クリスチャンをそれ以外の人たちと区別するしるしのようなものがあることを教えていました。私は、この「しるし」が何なのかがとても気になりました。しるしとは何だろうか？まさか額に「クリスチャン」と彫ってある入れ墨のようなものではないだろうし...もちろん違う。もしくはシャツに付けるバッジだろうか。十字架のネックレスをつける人もいるけれど、クリスチャンだけではなく未信者でも身に着けるアクセサリーとして最近は多くの人が十字架を身に着けているし。クリスチャンとそれ以外の人を区別する「しるし」とは何だろうか？私は本棚から本を取り、座って読み始めました。次が、この本の冒頭部分です。

「クリスチャンはいつも美しい姿を世に見せて来たわけではありません。クリスチャンは何度も愛の美しさ、キリストの美しさ、神の聖さを示すのに失敗し、世は背を向けてしまいました。もう一度、世に目を向けさせる方法はもう残っていないのでしょうか？— 今度こそ、真のキリストの教えに対して.....私たちがクリスチャンであると、どのように世に示していくべきなのでしょう？何世紀にも渡って、クリスチャンであることを示そうと、人々は象徴的なことを様々に試みてきまし

た。上着の襟の部分にしるしを付けてみたり、首から鎖をぶら下げてみたり、特別な髪型にしてみることだってしてきました。ですが、もっと良いしるしがあるのです。－イエスが戻って来られるその時まで、教会で万世にも続く、世界共通のしるしです。イエスはご自分の働きの上めくりに、イエスが戻って来られるその時まで、どのようなものがクリスチャンたちを特徴づけることになるのかを明確にされました。」

そしてここでシェーファー師はヨハネの福音書 13:34-35 節を引用しています。

「13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

もう一度 35 節を見てみましょう。「13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

これがクリスチャンを識別するためのしるしであり、これによって人々は私たちがクリスチャンであると分かるのです。互いの間に愛があることによって。今日の説教では、このトピックについてのフランシス・シェーファー師の考えと併せて私の考えもご紹介したいと思います。

シェーファー師がまず指摘しているのは、ここにあるイエスの御言葉は戒めであるということです。戒めとは、残念ながら私たちが忘れてしまったり無視してしまったりする可能性のあるものです。もしもここにあるイエスの戒めに従うことに失敗してしまったり、私たちはクリスチャンではない、ということではありません。これが意味しているのは、クリスチャンとして識別されるためのしるし「愛」を持つ証人となっていなければ未信者の人は私たちがキリストに従う者であるということを認識することができないということです。私たちは、世が私たちの間にある愛を目にすることができているかどうかを常に意識しなければなりません。ここで思い出すのは、キリスト教の歴史を勉強した時に学んだことです。古代世界では、人々は家族同士の世話をすることに非常に献身していたのですが、たとえ隣人が困窮していたとしても、通常は親類ではない人たちの世話をすることはありませんでした。けれども、クリスチャンの共同体の中では、親類ではない人たちでも病気であったり困窮していたりする場合は世話をし、近隣の未信者に対しても同様に世話をすることが頻繁にありました。これは未信者に深い感動を与え、多くの人がクリスチャンの信仰に惹かれました。ヨハネの福音書 13 章 34 節に戻ってみると、ここに目が留まります。イエスは「わたしがあなたがたを愛したように、」と言われました。「わたしがあなたがたを愛したように」。つまり、「私があなたがたを愛したのと同様に」、そのようにして私たちは互いに愛するべきなのです。イエスはいくつか異なる方法で、ご自分の愛を弟子たちにお示しになりました。直接的に文脈に関わるヨハネ 13 章では、イエスの弟子たちへの愛が実践的に示された例が少なくとも 2 つあるのが分かります。一つはイエスの処刑の前夜、イエスと弟子たちが過越の祭りの食事をしてた時の話です。ヨハネの福音書 13 章 1 節には「13:1 さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。（新改訳）」とあります。

ここには、イエスは「自分のもの」を愛されたとあります。つまり、弟子たちのことです。そして新アメリカ標準訳聖書(NASB)にはイエスは彼らを「最後まで」愛された、とあります(日本語新共同訳では「愛し抜かれた」)。彼らが過越の食事を始めると、イエスが予想もしなかったことをされます。ヨハネ 13:4-5 「13:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。13:5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。」当時、食事をするために来客が家に到着すると、その家のしもべの一人が客の足を洗うというのが慣習でした。道路は埃っぽく、家に到着する頃には足は汚れてしまうものでした。ですから、通常は奴隷やしもべが来客の足を洗う仕事を割り当てられていました。けれども、このイエスの弟子たちとの過越の食事では、誰も足を洗っていませんでした。ですからイエスは席を立って、ご自分でその役割を担われたのです。弟子たちはそれに驚きましたが、イエスは彼らに教えたかったのです。13 節から 17 節を見てみましょう。

ヨハネ 13:13-17 「13:13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。13:14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。13:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。13:17 あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。」

このお話をするからと言って、互いの足を洗おうと唱えようとしているわけではありません。受難日を覚えて、もしくは受難日ではなくても復活祭の時期の晩に互いの足を洗うクリスチャン団体もありますし、その体験がどのような素晴らしいものだったか証する人たちもいます。けれども、私が焦点を当てたいと思っているのは足を洗うことではなく、次のことです：クリスチャンの同胞の必要に対して敏感になること、です。この夜の過越の食事では、もてなしの重要な部分を担う仕事がまだなされていないことに弟子の誰も気づいていませんでした。彼らの足は汚れていましたが、誰も自分が足を洗う人になろうと思わなかったのです。先生であるイエス以外には。私はこれを、クリスチャンの同胞の必要に敏感になることの教訓としてとらえています。15 節ではイエスはこう言われました。「13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」イエスは模範を示されたのです。他の人の必要に敏感になるという模範です。そして、他の人に仕えられるほどにへりくだることの模範をも示されました。

16 節でイエスは「13:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、」と言われましたが、それにも関わらず、イエスの模範においては、イエスは弟子たちに仕えました。ここで思い出すのは、私のお気に入りの聖書箇所の一つで、これに沿って生きようと努めてきた聖句です。

フィリピ 2:3-4 「2:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。2:4 自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。」

私たちは他の人を自分たちよりすぐれた者だと思わなければなりません。新国際版聖書(NIV)にはこう訳されています。「へりくだって、人を自分よりも尊びなさい。」自分よりも他の人を尊ぶ—そして4節には自分だけではなく他の人の思いにも配慮するようにしなさい、とあります。5節から8節まで読み進めると、キリストと同じ態度を持つための熱心な勧めが書かれているのが分かります。

第二の神格として、イエスはご自身を無にしてしもべのかたちをとることを選ばれたのです。イエスはこの世に人としてお生まれになりました。十字架上の死を通して人類を贖うために人の姿を取られたのです。ですから、私たちもへりくだって、兄弟姉妹を助けるために喜んで自らを低くするべきなのです。

ピリピ 2:5-8 「<sup>5</sup>あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。<sup>6</sup>キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、<sup>7</sup>ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、<sup>8</sup>自分を卑しくし、死にまでも従い、実に十字架の死にまでも従われました。

ヨハネ 13章に戻りましょう。最後の過越の食事で、

少なくとも2回、イエスの弟子たちへの愛が実践的に示されたと言いました。一つ目はイエスが弟子たちの必要に敏感であったこと、そして2つ目は十二弟子の中でも強情な弟子と関係があります。1節でヨハネはイエスが「....世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を（最後まで）残るところなく示された。」とありました。イエスは最後まで、弟子たち全員を愛されたのです。ご自分を裏切る計画を立てていた者までも。2節には「悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、」とあります。それでもイエスは弟子たちの足を洗ったときにユダをもその中に含めました。過越の食事にも加えました。過去3年間十二弟子に加えられ、イエスが最後の食事の時まで愛されたにも関わらず、ユダの心はイエスを裏切る方向へとねじ曲がってしまっていました。ユダは弟子として残るためのあらゆる機会を与えられていたのに、最後にはイエスの愛を拒絶してしまったのです。同様に私たちも、福音を分かち合う人たちすべてに前向きに応答するためのあらゆる機会を与えるべきです。しかし、キリストに信仰を置くかどうかの最後の選択権は彼らにあることを覚えておかななくてはなりません。

ヨハネ 13章に時間を費やしてきましたが、愛というテーマは聖書全体を通して見ることができます。マタイ 22:35-40「そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。36「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」37そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』38これがたいせつな第一の戒めです。39『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。40律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

最初の戒めは申命記 6章 5節から、二つ目の戒めはレビ記 19章 18節から引用されたものです。なによりもまず私たちは私たちを創造された神を愛します。そして私たち一人ひとりが神の似姿に造られたのですから、私たちは人間の仲間も同じように愛さなくてはなりません。隣人を、そしてクリスチャンと同様に未信者の人たちをもです。テサロニケ第一 3章 12節にはこうあります。

「3:12 また、私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いの間の愛を、またすべての人に対する愛を増させ、満ちあふれさせてくださいますように。」

クリスチャンの仲間に対する愛...そしてすべての人に対する愛です。最初の手紙で、使徒ヨハネは励まし言葉を与えていますが、それは同時にパンチのきいた言葉でもあります。

ヨハネ第一 4:9-13 「4:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。4:11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。4:12 いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。4:13 神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります。」

先に愛してくださったのは神の方で、私たちの罪のために十字架にかけられ私たちを救うために、神はご自身の御子を世にお送りになりました。10 節から私が思い起こすのはローマ 5 章 8 節です。

「5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」

ヨハネ第一の 4 章に戻ってみると、11 節で「神が愛してくださったのなら、私たちも互いに愛すべきです」とあり、12 節には「もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。」、13 節には「私たちのうちに聖霊がおられる」とあります。けれども、ヨハネ第一 4 章 20-21 節には「20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちがこの命令をキリストから受けています。」

とあります。とても強い言葉ですね。ヨハネは際立って白黒つけるような表現をよく使います。ヨハネは、私たちが神を愛していると言いながら兄弟を憎む状態にあればそれは大きな矛盾だという考えを私たちの心に印象付けているのです。あなたにも兄弟に対してもっともな訴えがあるかもしれません。けれども心の中でいつまでも憎しみを抱くべきではありません。神はあなたを愛しておられ、あなたを赦されます。あなたも同じようにして兄弟を赦さなければなりません。主の祈りの一部にはこうあります  
マタイ 6:12 「私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」

さて、個々の人間関係についての話をしてきました。次は、時に起こりうるもう一つの問題を見てみましょう。それは、「無神経な心」です。先ほど、私たちは兄弟姉妹の必要に対して敏感でなければならないとお話しました。ヨハネ第一 3 章 16-18 節を見てください。

「3:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。3:17 世の富を持ちな

がら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。3:18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」

兄弟の必要に応じる能力がありながら、その人に心を閉ざすような人の内に、どうして神の愛があると言えるでしょうか？これで思い出すのはガラテヤの2章です。使徒パウロが異邦人の間での最初の働きを始めた時、エルサレムの教会の指導者たちはパウロに承認のしるしを与えました。

ガラテヤ 2:9-10 にパウロはこう書いています。「<sup>9</sup>そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケパとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し伸べました。それは、私たちが異邦人のところへ行き、彼らが割礼を受けた人々のところへ行くためです。<sup>10</sup>ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところですよ。」

この最後の部分にはいつも心打たれます：「貧しい人たちを顧みる」....生きていくのに必要な物資を欠いて困っている人たちを覚えること。伝道と言う重要な勤め—キリストにある救いの良い知らせを告げ知らせることの内に。—パウロ、バルナバ、ヤコブ、ペテロ、そしてヨハネは貧しい者の必要が満たされるのが必須要素であると認めたのです。私たちの時代でも、貧しく、助けを必要としている人がいることを覚えておかななくてはなりません。必要なのは生きていくための実用的な助けです。私が新生したクリスチャンになりたての時代、まだ大学生だった時に、師と仰ぐ人たちからある姿勢を取り入れました。今となってはその姿勢はあまり均整の取れたものだと思わないのですが。私は、未信者の人との関わりの中でただ一つ大事なことは、福音のメッセージを彼らに伝え、その人たちのたましいが救われることだけだと教えられました。「社会的福音」と呼ばれていたものはあまり評価しないようにと教えられたのです。「社会的福音」とは、伝道をしてたましいが救われることよりも、貧しい人に施しをして社会的運動を促進して行くことに重きを置くこととして定義されていました。社会問題に関わることは、リベラル（自由主義）の人たちがすることで、私たち聖書を信じる保守派がすることではないと私は教えられたのです。社会的福音が道からそれてしまったのは確かかもしれません。けれども、私は自分の社会問題に対する消極的な態度をクリスチャンの生き方としてみた時に、それは均整の取れていない不完全なものであると気付いたのです。その狭い視点から抜け出し成長し、早い時期に教わったことを正していくには数年かかりました。幸いにも、御言葉を何度も何度も読むようにも教えられていたので、聖書全体を頻繁に通読するという習慣を通して、ガラテヤ2章9-10節やヨハネ第一章3章17節などと会うことができ、それにより心を軌道修正し、他の人の実用的な必要を満たすことは均整の取れたクリスチャン生活、完全なクリスチャン精神の一部であると言うことを理解するに至ったのです。これを思うと、何年も前に聞いた話を思い出します。私はアメリカ出身なのですが、アメリカのレストランでは、客はウェイトレスにチップを残すものだと考えられています。ウェイトレスの給料はあまり高くありませんから、多くの部分は客から得るお金に頼っています。あるクリスチャンの家族が、通常どおり金品でチップを残すよりも、自分たちがもっと価値があると思うものを代わりに残そうと決めました。お金の代わりに、福音のトラクトを“チップ”として残したのだそうです。ウェイトレスがそれをどう

思ったか想像できますか？ポケットに入るはずだったお金の代わりにありがたいと思えない読み物があったのです。彼女はきっと「このクリスチャンたちはケチね。私のことなんて気にしていないんだわ」と思ったでしょう。実際に、その客が彼女に残したメッセージはその通りのものだったと私は思います。その話を聞いた時に私が思ったのは、その家族がすべきだったことは、福音のトラクトと一緒に、寛大な金品のチップを残すことだったと思います。そうすれば彼女は福音のメッセージの価値についてもっと学ぶことがあったことでしょう。もう一つ話をお分かちしてもいいでしょうか。私が年々も前に夏の宣教プログラムで初めて日本に来た時に、1960年代に日本へ渡り、どこか小さな町に住んでいた宣教師の夫婦の話を聞きました。その町に滞在する間、その夫婦は何度も英語を教えてほしいと頼まれたそうです。けれども彼らはいつも断りました。日本へは英語を教えに来たのではなく福音を伝えるために来たのだからと言ったのだそうです。けれども、地元の人が求めていた必要に応じることを拒んだことがその町の住民に伝えたメッセージは、その夫婦が地元の人を気にかけていないということでした。そして彼らが力を入れた伝道活動も実りのないものとなったのです。人々の実用的な必要を満たすことは、私たちが、そして神がその人を気にかけていることを示すのだと、私たちは覚えておかななくてはなりません。再びヨハネ第一 3:17-18に戻ります。

「3:17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。3:18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」

ことばや口先だけで愛するのではなく、行いと真実を持って愛そうではありませんか。私たちの愛は実際に目に見える必要があるのです。ただ口先だけで表現するものではありません。

今日の説教は、フランシス・シェーファー師と、私が大変感銘を受けた彼の本のことを紹介して始めました。ここまで、今日の説教のほとんどは、私がヨハネ 13章と関連するヨハネ第一などから得た考察を紹介してきました。最後に、ヨハネの福音書にある、「クリスチャンのしるし」を定義づけるもう一つの聖句について、シェーファー師がコメントした内容をもってまとめたいと思います。

ヨハネ 17章には、十一人の弟子たちと共に屋上を經ってゲツセマネに向かってからイエスが祈った「大祭司の祈り」と呼ばれる祈りがあります。この祈りの中でイエスは、弟子たちのために父なる神に祈ります。それは、十一人の弟子たちの証からクリスチャンの福音を受け入れたすべての新しい弟子たちも含まれています。

ヨハネ 17章 18-21節 「<sup>18</sup> あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。<sup>19</sup> わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです。<sup>20</sup> わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。<sup>21</sup> それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」

21 節をもう一度見てみましょう。イエスは弟子たちがみな一つとなるように祈っておられます。御父と御子が一つであるように。そのことによって、御父が御子を世にお送りになったことを世が信じるためです。クリスチャンの弟子たちが真に一つになる時、世は御父が本当に御子を世に送ったのだと知るようになるのです。これが、真のクリスチャンの弟子が必要とするもう一つの「しるし」です。この「一つとなること」とはどのようなものなのでしょう。21 節についてシェーファー師が述べていることをご紹介しましょう。ここで述べられている一致は組織としての一致ではありません。あらゆるクリスチャンに対応する包括的な教会組織を見かけることはないでしょう。文化的、言語的、政治的問題が多くあり、組織的一致を作り出すことを実行不可能にしています。「世界教会運動」と呼ばれるものもこの一致を達成するのに正しい方法ではありません。重要な教理において妥協を許しすぎることによって一致を求めようとしているからです。シェーファー師は、この一致は視覚的に見えるものであると言っています。教派が存在していてもそれを超えて目にすることができるような、真のクリスチャン同士が互いに持つ愛です。教理上の相違から論争が起こって苦々しい思いを抱くことがあっても、クリスチャンが互いを純粋に赦そうと行動する時、世に対して力強い証となることのできるのです。

兄弟たちと論争が起こりうるのは教理上の相違だけではありません。シェーファー師は、第二次世界大戦中に宗教団体を支配することに力を入れたナチス政権に対してどのように応答するかで内部が分裂してしまったドイツのある福音派団体について触れています。この教派の中には、政府に対して妥協することを選んだ教会もあれば、妥協を許さなかった教会もありました。妥協した教会は、戦争の期間を比較的快適に乗り切り、一方で妥協しなかった教会は迫害に苦しみ、多くの家庭で親類が強制収容所に送られるのを目にすることとなりました。戦争が終わり、この2つのグループはどのようにして和解したのでしょうか。教会の指導者たちは集い、全員が何日もかけて一人で祈り、黙想し、自分の心を探りました。私たちは自分の心に潜んでいるものを知っています。そして、自分があらゆる点で不完全であることを知っています。私たちは皆あれこれとキリストをがっかりさせ、主の赦しを必要とするのです。何日も祈った後、指導者たちは再び集まり、自分たちが赦しを必要としていることを理解しました。すると、また皆が再び一つになれたことに気づいたのでした。

ペテロ第一 4:8 「4:8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」

コロサイ 3:12-14 <sup>12</sup>それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。<sup>13</sup>互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。<sup>14</sup>そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」

これらすべての上に、結びの帯として愛を身に着けるのです。最後に今日の中心聖句であるヨハネ 13 章 35 節を引用して終わらしましょう。

ヨハネ 13:35 「13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」